

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第二十一回 カミと God

南出喜久治 (令和7年7月1日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

「God」を「神」と訳したことは、究極の誤訳です。God とは、一神教における創造主、造物主のことで、絶対的存在を意味するものです。ユダヤ教のヤハウェ、キリスト教の God (主)、イスラム教のアッラーと、呼び名は異なりますが、同じ性質のもので、これらをすべて God と表示することにします。

他方、創造主や造物主ではない多神教の「神」のやうに、祖霊をも含めたカミ (上) とは区別する必要があります。そこで、本書では、仏教の「如来」、「菩薩」、「明王」、「天部」などの仏の階層に属する「覚者」を「仏」とし、祭祀における祖霊のカミ (上)、古神道における天津神、国津神、八百万の神々、神社神道における御祭神、さらに、祖霊も含めて「神」して総称することとし、神仏混淆による仏教の仏と祭祀や神道などの神とを併せて「神仏」と表現することにします。

ところで、「God」の起源は、旧約聖書の原典のヘブライ語のエロヒム (「Eloheim」又は「Elohim」) であり、「im」は複数形を表すものです。ヘブライ語原典の聖書には、数へ切れないほど「エロヒム」が出てきます。単数形は、「Eloh」 (エロハ) ですが、聖書では、エロハではなく、すべてエロヒムです。このエロヒムといふ言葉は、「天空から降りてきた人々」といふ意味です。複数の人間なのです。竹内文献などで語られる「宇宙人飛来説」を想像しうる記載なのです。「God」を「神」と訳するのは最大の誤訳ですが、仮に、これを神と訳したとしても、「神々」と複数形になるのです。これは、前述したヘブライ神話が影響してゐます。ここにも一神教の矛盾が隠されてゐるのです。

キリスト教神学では、先ほど述べた予定論 (予定説) といふ見解があります。

これは、God の救ひは、人の行動や努力とは無関係に、すでに God の意志によつて定められてゐるといふものです。パウロからアウグスティヌスを経てカルバンが「ある者は救ひに、他の者は滅びに予定されてゐる。」といふ二重予定論に至つたものです。

救ひへの願ひが成就するのは、すべて God の恩恵によるものであるといふのです。

また、理神論といふ、欧州の啓蒙時代に栄えた見解もあります。

これは、God は、世界・天地の創造主であるが、創造された後の世界は、God によつて定められた自然法則に従つて進展するものであり、もはやこの時点以後は God は関与しないといふ見解です。

この二つの見解は時代背景も論理構成も異にしますが、人間の意志は God に一切影響を与へず、または、人間の意志によつて運命が変はることはないといふことであつて、運命論、宿命論として共通してゐます。

予定論（予定説）といふのは、宝くじのやうなものです。宝くじを買つた者（信者）は、当選すれば大金（天国行き）を手にすることができます。宝くじを買はなかつた者（非信者、異端者）は、絶対に当選しないといふ仕組みです。当選するか否かは買ったときには解りませんが、胴元（God）は初めから当選者を知つてゐるといふことです。

当選できる可能性を与へられたのは胴元（God）の恩恵なので感謝しろと言ふのですが、博打に加はることができたことが恩恵なので感謝しろといふのは納得の行く話ではありません。

また、理神論でも、人として生まれる機会を遠い祖先に与へたことが God の働きで、それ以後において自然法則に基づく祖先から命を受け継いだことを感謝しろと言はれても、このやうに説明は到底納得の行くものではありません。

命を受け継いだとか、生かされてゐるといふことの感謝の気持ちをこんな運命論、宿命論の理屈で納得しろといふことは強引すぎます。祖先へ素直な感謝を捧げる祭祀とは余りにも隔たりが大きすぎるのです。